

## 報 告

学校における食物アレルギー・アナフィラキシー対応と  
養護教諭の役割山田 玲子<sup>1)</sup>, 山田 茉奈<sup>2)</sup>, 山角亜沙美<sup>3)</sup>, 岡田 忠雄<sup>4)</sup>

## 〔論文要旨〕

本研究の目的は、学校における食物アレルギー・アナフィラキシー対応の現状と養護教諭の取り組みを知ることから、学校における課題を明らかにしたうえで、養護教諭に求められる役割について検討することである。小・中・高等学校の現職養護教諭を対象に半構成的面接を実施した。その結果、学校における対応の現状として、対象の児童生徒が安全安心な学校生活を送るために、【事前の食物アレルギー対応】、【アナフィラキシー発症時の対応】、【日常的な対応】に分けて多様な支援を行っており、また宿泊行事においても、綿密な【宿泊行事前の準備】と注意深い【宿泊行事中の支援】の様子が明らかになった。さらに、対応の課題として、【準備徹底の困難】と【教員の意識の差】が挙げられ、そのような状況での養護教諭の役割として、【対応のプロであること】、【コーディネーターの役割】が求められていると認識されていた。養護教諭は学校救急処置時には、冷静で的確な対応と連携に関して責任をもつことが重要である。特に食物アレルギー・アナフィラキシー対応に関しては、その症状の多様性から、養護教諭はさまざまな状況に冷静な判断と迅速な対応ができる力量と医学看護学的な知識と技術を活かすことが重要となる。そして、学校においてコーディネーターの役割を果たし、必要な対応を教職員全員が理解することから、安全安心を確保できる学校体制をつくっていくことができると考える。

Key words : 食物アレルギー・アナフィラキシー対応, 学校救急処置, 養護教諭

## I. はじめに

近年、子どもを取り巻く社会環境や生活環境の急激な変化に伴い、アレルギー疾患に罹患している児童生徒の増加が指摘されている<sup>1)</sup>。平成20年1月の中央審議会答申<sup>2)</sup>においては、学校生活で顕在化している新たな健康課題として、アレルギー疾患が挙げられている。全国の公立学校に通う児童生徒を対象にした調査<sup>3)</sup>によると、アレルギー疾患の罹患率は、「アレルギー性鼻炎（花粉症含む）」が12.8%、「ぜん息」が5.8%、「アトピー性皮膚炎」が4.9%、「アレルギー性結膜炎」が5.5%、「食物アレルギー」が4.5%、「ア

ナフィラキシー」が0.48%であった。このことから、多くの学校現場においてアレルギー児童生徒が在籍している現状が見受けられ、特に食物アレルギー・アナフィラキシーに関しては、学校給食等との調整も必要となり、養護教諭をはじめとする教職員の対応や役割の重要性が問われている。

平成20年に文部科学省は関係機関との協力のもと「学校のアレルギー疾患に対する取り組みガイドライン」<sup>4)</sup>を発刊した。このガイドラインにおいてはアドレナリン自己注射薬（以下、エピペン<sup>®</sup>）の自己注射を本人に代わって教職員が打つことは医師法に違反しないという初めての見解が示された。また、学校生活

The Role of *Yogo* Teachers (School Nurses) in Responding to Food Allergy/  
Anaphylaxis Reactions at Schools

〔3230〕

受付 20. 4.10

Reiko YAMADA, Mana YAMADA, Asami YAMAKADO, Tadao OKADA

採用 20.12.11

1) 北海道教育大学札幌校医科学看護学研究室（研究職／看護師）

2) 横浜市立池上小学（養護教諭）

3) 北海道教育大学附属札幌中学校（養護教諭）

4) 北海道教育大学札幌校医科学看護学研究室（研究職／医師（小児外科））

管理指導表(アレルギー疾患用)が示され,アレルギー疾患を有する児童生徒への対応が詳細に明記されるようになった。また,平成27年には「学校給食におけるアレルギー対応指針」<sup>5)</sup>が発行され,食物アレルギーの児童生徒への対応がより明確化された。このように,子どもたちが一日の大半を過ごす学校において,教職員の果たすべき役割や,緊急時の救急体制の確立,保護者や医療機関との連携は重要とされている。特に養護教諭は,学校保健活動の推進にあたって中核的な役割を担っており,日頃からの救急体制づくりや指導の充実,教職員への医学的な知識・情報の提供,アナフィラキシー発症時の救急処置等,学校における対応において果たすべき役割は大きい。

先行研究では<sup>6)</sup>,学校における食物アレルギー児童生徒への取り組みや養護教諭の対応の実態を明らかにしている。チーム学校として連携が重要視される一方で,教職員との連携の難しさに戸惑う養護教諭がいることや,教職員とは連携が図られているが保護者とはあまり関わる機会がないという報告もある。また,食物アレルギー・アナフィラキシー対応に自信がもてず不安である養護教諭が少なくないことも明らかになっている<sup>7)</sup>。このような実態から,学校におけるアレルギー対応の現状を知り,チーム学校の一員として養護教諭はどのような役割が求められるのか考察する意義は大きい。

## II. 目的

本研究では,現職の養護教諭にインタビュー調査を実施し,学校における食物アレルギー・アナフィラキシー対応の現状と養護教諭の取り組みを知ることから,その対応時の課題を明らかにしたうえで,養護教諭に求められる役割について検討することを目的とした。

## III. 対象と方法

### 1. 調査対象

北日本のA地域の現職養護教諭4人。

### 2. 調査期間

平成30年11月13日～12月4日。

### 3. 調査方法

半構成的面接法を用いて30～60分のインタビューを実施した。

## 4. 調査内容

インタビューでは,対象の養護教諭が経験した学校における食物アレルギー対応や宿泊行事での準備・対応について語ってもらうとともに,「養護教諭が行っている支援」,「保護者との連携」,「病院等関係各所との連携」,「アレルギー児童生徒の学校での様子」,「養護教諭からみた支援の難しさや課題」等について尋ねた。

## 5. 分析方法

面接内容は対象者の許可を得て録音,逐語録として整理し,逐語録上の言語的データを分析の対象とした。逐語化したデータは内容ごとに文脈を損なわぬように切片化し,類似の解釈をまとめてサブカテゴリーとカテゴリーにまとめた。文中,サブカテゴリーは〈 〉,カテゴリーは【 】で,切片化した言語的データは「 」で示した。

## 6. 倫理的配慮

本研究は,北海道教育大学札幌校研究倫理審査委員会の承認(北教大研倫18011004)を得て実施した。研究対象者への聞き取り調査にあたり,個人情報取り扱いに配慮した。また,聞き取り調査結果のデータは本研究以外に使用しないことや,答えたくない設問の場合配慮する旨を文書および口頭で伝え,インタビュー調査の同意書を文書で渡したうえで実施した。

## IV. 結果

### 1. 対象の属性

対象者の属性を表1に示した。30代から50代の女性養護教諭4人であり,経験年数の平均は,16.0(8～32)年であった。

### 2. 学校における食物アレルギー・アナフィラキシー対応の現状

学校での食物アレルギー・アナフィラキシー対応の

表1 対象者の属性

対象者	年代	経験年数	経験校種
A	30代	10年	小学校
B	30代	8年	特別支援学校, 中学校
C	30代	14年	高等学校
D	50代	32年	小学校, 中学校

表2 食物アレルギー・アナフィラキシー対応の現状

カテゴリー	サブカテゴリー	言語的データのヴァリエーション
事前の食物アレルギー対応	食物アレルギー対応に関わる調査や確認	「アレルギー個人調査票は保健室や職員室で保管して何かあったときに全員が閲覧できる」、「アレルギーがある子は全員面談して対応を相談」、「親学校（調理施設のある近隣の学校）からの確認の依頼により保護者に電話」、「病院名とか何アレルギーかをチェックする」、「年度初めの職員会議で写真を見せてこの子が何アレルギーですと（教職員に）伝える」、「校務支援システムに入力」、「問診では“今日は朝ご飯何食べた？”とか“何かいつもと違うもの食べた？”と聞くようにしている」
	栄養教諭とのこまめな情報共有	「こまめにアレルギー児（の存在）とその日の（献立の）やり取り」、「献立表が回ってくるので確認」、「情報共有はこまめに」、「給食の前後は情報共有」、「エピペン <sup>®</sup> 講習会と一緒に参加して、学内研修を企画する」
	エピペン <sup>®</sup> の使用と学校での対応	「保健室とか教室で保管して棚に目印を付けて誰でもいつでも（エピペン <sup>®</sup> ）使える」、「（生徒がエピペン <sup>®</sup> を）自分で持つようになってからは担任の先生が毎朝確認して」、「エピペン <sup>®</sup> トレーナーでの講習は栄養教諭と協力して毎年やっている」、「低・中・高学年の先生に（エピペン <sup>®</sup> トレーナーを）渡して必ずやってもらう」
アナフィラキシー発症時の対応	突発的なアレルギー症状の出現	「給食後の昼休みに体育館で遊んでいて急に蕁麻疹が出現」、「喉痛い、呼吸もゼロゼロしてきて」、「ノーマークの子が（症状）出た」、「既往がない子がアレルギー発症疑いで来室したときは怖い」、「（救急車を）呼ぶか迷い、保護者に連絡して病院連れて行ってもらった」、「（救急車呼ぶか）管理職とも相談」、「内線かけたり担任の先生や顧問の先生を呼び多人数で見れるよう」
	こまめで迅速な保護者への連絡	「学校で様子見てもいいのか、お母さんに来てもらえるのかを確認して、保護者の判断も取り入れる」、「小さなサインを見逃さないようにしており、常に目が離せない」、「保護者とはできるだけ連絡を取るようになっている。ちょっと怪しい症状が出たら、とりあえず連絡」、「管理職と相談しながら対応していて、なんとか保護者の方と連絡が取れると、すぐに迎えにきてもらう」、「保健室で1時間様子見て、その間に担任の先生に保護者へ連絡してもらうようにしている」
	教職員との連携	「管理職と相談しながら対応していて、なんとか保護者の方と連絡が取れて、すぐに迎えにきてもらって」、「保健室で1時間様子見て、その間に担任の先生に保護者へ連絡してもらうようにしている」
	救急車要請の判断と事後措置	「（状態がひどいと）保護者と連絡取れなくても救急車を呼ぶ」、「救急車来ると学校も大騒ぎで（対象児以外の）保護者からも問い合わせがある」、「救急車を呼ぶか迷い、結局タクシーで学校医の病院を受診」
	症状が落ち着いてからの本人への指導	「（アレルギーのため）食べられないってわかってるものは食べないという指導を、少し時間が経ってから行う」、「（今回は）大丈夫だったけど、彼にしかわからない辛さなので、気が済むまで（話に）付きあってから指導するようになっている」
日常的な対応	アナフィラキシー発症への危機感	「一つの可能性としてアレルギーを疑う」、「アレルギーあるかい？と聞く」、「昨日の晩何食べたとか」、「すぐにアレルギーだと判断できる症状がなくても、念のため確認はする」
	保健指導と心のケア	「そうだよ、つらいねって、受け止めるように」、「（保健指導を）全体にはあまりしない。個別に、本人にお話をする」、「食べられないとか、悲しい時代は小学校でさんざん経験していて、中学校ではわりと悟りの境地みたいなので、静かに見守る」、「本人だけではなく周りへの対応もする」

現状としては表2に示すとおり、【事前の食物アレルギー対応】、【アナフィラキシー発症時の対応】、【日常的な対応】の3つのカテゴリーにまとめられ、養護教諭が行う多様な対応が示された。

【事前の食物アレルギー対応】においては、〈食物アレルギー対応に関わる調査や確認〉、〈栄養教諭とのこまめな情報共有〉、〈エピペン<sup>®</sup>の使用と学校での対応〉

の3つのサブカテゴリーがあり、事前に準備や確認することの大変さと重要さが指摘された。【アナフィラキシー発症時の対応】においては、〈突発的なアレルギー症状の出現〉、〈こまめで迅速な保護者への連絡〉、〈教職員との連携〉、〈救急車要請の判断と事後措置〉、〈症状が落ち着いてからの本人への指導〉の5つのサブカテゴリーがあり、必要な緊急対応と発症時のみ

表3 宿泊行事における食物アレルギー・アナフィラキシー対応

カテゴリー	サブカテゴリー	言語的データのヴァリエーション
宿泊行事前の準備	綿密な健康調査の実施	「(本人や保護者と)面談して成分表の要不要を確認」、「健康面で配慮必要な子を一覧にして再度確認」、「羽毛(寝具)も調べる」、「事前に健康調査をさらにもう一回する」
	旅行会社・保護者と直前まで確認	「基本は代替食」、「旅行会社と保護者と直前までやり取り」、「保護者にプリントを作って自己除去・代替食・除去食をチェックしてもらう」、「(準備がぎりぎりになって) 私たちもやきもきし、さらに教員も初めての宿泊先だと、どのように対応してもらえるのかわからないので、決めにくいところはある」
	緊急時の連絡先	「保護者の連絡先しっかり」、「複数の連絡先を把握できるよう」
宿泊行事中の支援	本人への食べないことの確認と教員の見守り	「(アレルギーの)メニュー取ってないよねって確認」、「配膳されたもの以外絶対食べないで、と伝える」、「教員が目を光らせて食べないように見守る」、「食べ終わったら見に行ったら大丈夫だった?と聞く」
	周囲の生徒への理解	「絶対あげるとかやめてね、と伝える」、「生徒同士でやり取りすると管理しきれないことがある」

表4 学校における食物アレルギー・アナフィラキシー対応の課題

カテゴリー	サブカテゴリー	言語的データのヴァリエーション
準備徹底の困難	教職員の役割分担の煩雑さ	「調査は養護教諭と栄養教諭、保健主事で行うが、調査の回収は担任」、「全員がその子についてわかっている必要がある」、「校内委員会で決める」、「管理職にはすぐに報告」
	保護者との要相談	「了解をとっておく」、「学校としてはここまでの対応と曖昧にせずに伝える」、「信頼関係を築くのに時間がかかる」、「(食物)アレルギーだって親が決めてしまっている場合は対応に困る」、「一度病院でみてもらってとお願いしても、いや、もうこれは(食物)アレルギーでしょう、と決めつけられてしまう」、「保護者に全然連絡がつかないことがある」
教員の意識の差	問題意識を持つ	「アレルギーの子が増えてきてる中で全員が学校の問題として捉えて欲しい」、「全教員がやらなければいけない問題だって認識して欲しいが、養護教諭に任せる雰囲気はある」、「これくらいの症状なら大丈夫ではないか?と言われる」、「先生方は(集団で指導する)授業とは違うため、個別の対応に難しさを感じるのかもしれない」、「(食物)アレルギーが命と直結する問題であるとか、迅速に対応しなければいけないと考えていない」
	組織として機能する	「(養護教諭が)付いて行けない校外学習もあるので先生方一人ひとりが養護教諭がいなくても大丈夫と思える環境を整えなければならない」、「組織として、学校全体として考える」、「地域に開かれた学校も意識して、教員全員が関わるようにする」

らず事後の対応についても示された。【日常的な対応】においては、〈アナフィラキシー発症への危機感〉、〈保健指導と心のケア〉の2つのサブカテゴリーがあり、日頃から危機感を持って対応していることやアレルギー児への配慮について示された。

### 3. 宿泊行事における食物アレルギー・アナフィラキシー対応

宿泊行事におけるアレルギー対応は表3に示すとおり、【宿泊行事前の準備】、【宿泊行事中の支援】の2つのカテゴリーが抽出され、事前の確認とアレルギー児だけではなく、周囲の児童生徒への配慮の必要性が示された。

【宿泊行事前の準備】においては、〈綿密な健康調査の実施〉、〈旅行会社・保護者と直前まで確認〉、〈緊急時の連絡先〉の3つのサブカテゴリーがあり、本人・保護者のみならず関係先すべてと周到に準備をする姿が示された。【宿泊行事中の支援】においては、〈本人への食べないことの確認と教員の見守り〉、〈周囲の生徒への理解〉の2つのサブカテゴリーがあり、養護教諭が対応するのみならず、旅行中はすべての引率教員や生徒の協力が不可欠であることが指摘された。

### 4. 学校における食物アレルギー・アナフィラキシー対応の課題

学校での食物アレルギー・アナフィラキシー対応の

表5 食物アレルギー・アナフィラキシー対応における養護教諭の役割

カテゴリー	サブカテゴリー	言語的データのヴァリエーション
対応のプロであること	緊急時の判断・対応	「緊急時や(生徒が)自分でできないときは応急手当が最も求められる」、「命に直結するので怖い」、「観察してすぐ判断」、「実際にやるのは自分」
	冷静さと落ち着き	「(症状が)急変したらどうしようと思っただけで心の中では思っているが(児童生徒の前では)落ち着いて」、「担任の先生や管理職を巻き込んでの対応になるので(焦りは)見せない」、「情報が集まって冷静に判断・対応するのは養護教諭」
	児童生徒への安心感の提供	「安心させるように、パニックにならなくてもいいよ、と声をかける」、「丁寧に話を聞く」、「できるだけ応援を呼び、先生方いるから安心して」、「お母さんくるよ、(と声をかける)」
	食物アレルギーに関する悩みを受けとめる	「『もういやだ』みたいになる」、「愚痴みたいな感じで来室する」、「その子の思いを全部わかってあげることにはできないなと思いつつ(話を聞く)」、「そうだね、と完全に聞き役になる」、「みんな違っていいんだよ(と伝える)」
	周囲の児童生徒への影響を最小限にする	「ベッドで寝てる子に会話が全部聞こえているから、教室戻すなり職員室に連れて行ってもらうたりする」、「狭い空間(保健室)で多くの子を相手にしなければならないときは大変だが、配慮しながら対応する」
コーディネーターの役割	チーム学校の一員としての責任	「対応しなければならない場面に遭遇する立場」、「ほかの先生とも『そうだね、そうだね』って言い合える一人になる」
	教職員の危機意識の差を埋める	「危機意識が人によって違う」、「理解に差」、「これくらい(の症状)なら大丈夫と思っている」、「先生方を引っ張っていくのも大事」、「個別の対応を嫌がる人もいて」、「アレルギーは大変なんだってこと伝えていくのも養護教諭」
	保護者と病院の連携を促す	「保護者に書類渡して確認お願いしますと」、「就学時検診のとき学校医にも相談して言ってもらったり」、「管理指導表が病院とをつなぐ紙」、「高校生になっても診断してない子がいる(ため、受診を促す)」

課題は表4に示すとおり、【準備徹底の困難】、【教員の意識の差】の2つのカテゴリーがあり、養護教諭が日々感じている課題が示された。

【準備徹底の困難】においては、〈教職員の役割分担の煩雑さ〉、〈保護者との要相談〉の2つのサブカテゴリーがあり、多くの教職員が関わる中で複雑多岐にわたる役割を分担することの大変さと、さまざまな対応に保護者との相談が必要であり、信頼関係構築が不可欠であることが指摘された。【教員の意識の差】においては、〈問題意識を持つ〉、〈組織として機能する〉の2つのサブカテゴリーがあり、教員の意識が高まっているものの十分ではない様子が示された。

##### 5. 食物アレルギー・アナフィラキシー対応における養護教諭の役割

食物アレルギー・アナフィラキシー対応における養護教諭の役割は表5に示すとおり、【対応のプロであること】、【コーディネーターの役割】の2つのカテゴリーが抽出され、緊急時でも冷静な対応が求められる養護教諭の姿と連携に関する責任が語られた。

【対応のプロであること】においては、〈緊急時の判

断・対応〉、〈冷静さと落ち着き〉、〈児童生徒への安心感の提供〉、〈食物アレルギーに関する悩みを受けとめる〉、〈周囲の児童生徒への影響を最小限にする〉の5つのサブカテゴリーがあり、養護教諭の専門性が発揮されている様子が示された。【コーディネーターの役割】においては、〈チーム学校の一員としての責任〉、〈教職員の危機意識の差を埋める〉、〈保護者と病院の連携を促す〉の3つのサブカテゴリーがあり、学校内のみならず、学校外の連携に関する配慮も重要であることが指摘された。

## V. 考 察

### 1. 学校における食物アレルギー・アナフィラキシー対応の現状と課題

学校における食物アレルギー・アナフィラキシー対応の現状として、対象の児童生徒が安全安心な学校生活を送るために養護教諭は、【事前の食物アレルギー対応】、【アナフィラキシー発症時の対応】、【日常的な対応】に分けて多様な支援を行っており、また宿泊行事においても、綿密な【宿泊行事前の準備】と注意深い【宿泊行事中の支援】を行っている様子が明らかに

なった。その中でも、【アナフィラキシー発症時の対応】として、養護教諭をはじめとする全教職員は〈突発的なアレルギー対応の出現〉に対処しなければならないという現状があった。またそこでは、事前に食物アレルギーを有することがわかっている場合の対応のみならず、全く既往がない場合や体育館で遊んだ後などに発症する食物依存性運動誘発アナフィラキシーについても対応していかなければならないという、学校における緊迫した状況も想定される。さらにそのような状況において、学校にいる教職員は〈こまめで迅速な保護者への連絡〉が必要となる。益子ら<sup>8)</sup>は、発症時の対応として、軽い症状であっても急速に症状が悪化することもあるため症状の観察を怠らず救急対応をすること、および学校内での連絡を速やかに行うこととしており、迅速な判断や行動が求められることを報告している。加えて、経過観察する中で症状が回復しない場合のみならず、軽症の場合においても保護者に学校に迎えに来てもらう必要があることが明らかになった。また、調査した養護教諭からは「既往がない子がアレルギー発症の疑いで来室したときは怖い」と来室対応でヒヤッとした経験も語られた。井岡ら<sup>9)</sup>は小学校の学校給食で初めてアレルギーの感作が発見される場合があること、浅田<sup>10)</sup>は、アレルギー疾患を有する子どもが多数存在する中で、学校でのアレルギー対応は一部の子どもたちのみでは留まるものではない状況となっていることを指摘している。これらから、健康調査等での事前の情報がない場合でも、子どものアレルギー反応はいつでも誰でも起こり得ると言える。そのため養護教諭は、アレルギーの申告のない児童生徒に対しても、保健室来室時の症状から「おかしいな」と感じたらアレルギーを一つの可能性として疑うことは大事な視点であると考え。保健室来室時の症状から、緊急事態であるかどうかの判断に迷う場合、養護教諭は身体症状の観察だけでなく、バイタルサインを測定して判断の指標にすることが大事な方法であり、また、学校においてはどの程度の症状で病院への搬送や救急車要請の必要があるかの基準を設け、全教職員で把握しておくことも大事である。さらに、教職員全員でさまざまな事例を想定し、シミュレーションを行っておく等、心の準備をしておく必要があると言える。平川<sup>11)</sup>は「ヒヤリ・ハット」の事実からアレルギーに対して認識を深め具体的な行動について学ぶべ

きだと指摘している。どのような状況においても、課題が見つかったときにはそれを戒めにして発展的に考え、児童生徒の安全安心を守るために必要な対応を考えて次に備えることが重要であると考え。

宿泊行事での食物アレルギー・アナフィラキシー対応については、【宿泊行事前の準備】と【宿泊行事中の支援】の両方が重要であることが示された。事前の準備として、成分表を基に、一つの食品ごと除去食・代替食・自己除去の対応を決めて、養護教諭は出発の数日前まで保護者や宿泊先とやり取りを行っていた。食事形態（バイキング、お膳）や宿泊先によって対応が異なるため、「（準備がぎりぎりになって）私たちもやきもきするし、さらに教員も初めての宿泊先だったりすると、どんなふうに対応してもらえるのかわからないので、決めにくいってところはあります」と難しさも挙げていた。また、養護教諭は当日の対応として、「教員が目を光らせて食べないように見守る」や「本人には、『配膳されている食べ物以外絶対食べないでね。』、『（アレルギーの）メニューは取ってないよね?』と確認し、周りの生徒に『絶対にあげるとかやめてね。』と指導する」と語っていた。食物アレルギーを有さない児童生徒は食物アレルギーに関する知識や理解は低い<sup>12)</sup>ため、学校ではアレルギーに関する知識をほかの児童生徒へも伝えることも必要であるとともに、旅行中は多くの目が届くように、養護教諭が対応するだけでなく、すべての引率教員や生徒の協力が不可欠であることが指摘された。食物以外にも、布団の羽毛にもアレルギー対応が必要であり、養護教諭が宿泊先と直接連絡を取り、換えてもらうよう対応を行っていた。宿泊学習といった開放感からの事故発生を防ぐためにも、教職員は細心の注意を払って慎重に対応をしていく必要があることが確認された。

## 2. 食物アレルギー・アナフィラキシー対応における養護教諭に求められる役割

次に学校における食物アレルギー・アナフィラキシー対応の課題から、養護教諭の役割を検討する。課題においては【準備徹底の困難】、【教員の意識の差】が、養護教諭が認識している役割においては【対応のプロであること】、【コーディネーターの役割】が示された。【準備徹底の困難】において、特に保護者の理解を得ることの難しさが語られた。児童生徒がもつアレルギーの有無が保護者の自己判断によるものである

場合、学校での対応が曖昧になってしまい困ることと、養護教諭は医療機関での検査を勧めるが、受診を渋ることがあるという経験が語られた。江尻ら<sup>13)</sup>は、保護者の申し出をそのまま受け入れると、客観的にみて食物アレルギーとは考えられないケースが増加してしまい、本来アレルギー対応が必要な児童生徒への対応が困難になると指摘する。一方で安西ら<sup>14)</sup>は、養護教諭の不安や困難感の一つに危機意識が低い保護者（管理指導表を提出するレベルではない、面談するほどではない、エピペン®を処方するほどではない等の自己判断をする）がいることを問題視している。これらから、養護教諭は保護者へも繰り返し、食物アレルギーではアナフィラキシーショックなどの重篤な状態になる可能性があることを伝えることで理解を求めたり、学校でできる対応を具体的に提示したりすることが求められる。その際、初めは効果が見えなくても繰り返し伝えたり、何らかのアプローチを継続的に行うことが重要であると考え。【教員の意識の差】においては、教職員へ個別の協力をお願いしても‘これくらいの症状なら大丈夫だろう’と軽視する教員がいることが語られた。調査した養護教諭は「先生方って、個別の対応に難しさや重さを感じるのかな。授業とは話が違うので。なんかそこまできている？みたいなのがすごくあるので。そこを会議の場でいかにわからせるかが大事」と述べた。西尾ら<sup>15)</sup>は、日頃から教師は食物アレルギー等に関連する事故とその救急処置について基礎的な理解を持っていることが必須と述べているが、今回のインタビューをとおして、実際に全教職員が同じようにアレルギーについて認識することには課題が多いことが確認された。このことに関しては、学校でチームとしての役割分担を事前に検討するとともに、自身が勤務する学校に在籍するアレルギー児の状態に対する正確な把握や事故が起きやすい状況の把握などが大切であることが指摘されている<sup>16)</sup>。さらに、教員の意識の差を埋めることについては、アレルギーに関する校内研修などを定期的に行うことや、その研修にシミュレーションを取り入れるなど実際に動いてみることで、問題点を共有できるような環境づくりをすることが有効である。そのことが〈組織として機能する〉ことにつながると考える。またそのためには、養護教諭の役割として認識されていた【コーディネーターの役割】が重要となる。児童生徒にとって安心していられるような学校体制をつくるには、養護教諭はアレル

ギー対応を含む学校保健の中核的な役割として「校内の体制づくり」と「教員の態勢づくり」という2つの側面<sup>17)</sup>から働きかけ、コーディネーターとしての役割を果たすことができるように尽力していくことが必要である。さらに、【対応のプロであること】も求められている。学校でのアレルギー対応の基本には、適切な情報把握、教職員への周知と共通理解、緊急時に備えた体制整備があり、中でも養護教諭は、発症者の実態把握、応急手当の実施、病院との連絡・調整、その他の経過把握等を行う<sup>18)</sup>ことから、果たすべき役割は大きい。特に学校救急時の応急処置においては、冷静な判断と迅速な対応が必要となる。前述したとおり、来室時の症状から緊急事態が想定される場合は、出現している症状の観察とともにバイタルサインを測定して判断の指標にするなど、養護教諭の持つ医学看護学的な知識と技術を十分に活かすとともに、常に研鑽を積むことで子どもの健康問題を的確に評価することができる。それこそが、養護教諭の専門性を発揮することにつながり、子どもたちにとって安全安心を確保できる学校づくりに寄与すると考える。

### 3. 本研究の限界と課題

本研究は、養護教諭の語りから、学校における食物アレルギー対応の現状と課題を明らかにし、養護教諭に求められる役割について検討することを目的とした。本研究の限界は、対象者が養護教諭のみ4人と少なく、各校種1～2人しかインタビューができなかったことから、結果をそのまま一般化できないことである。また、今後の課題は、対象の養護教諭を増やすことや、担任、管理職、栄養教諭などほかの教員からの意見をも聞き取り、養護教諭に求められる役割を多角的に捉えて検討することである。

## VI. 結 論

学校における食物アレルギー・アナフィラキシー対応時に養護教諭に求められる役割を検討することを目的とし、養護教諭を対象に半構成的面接を行い、以下の結果を得た。

学校における食物アレルギー・アナフィラキシー対応の現状として、対象の児童生徒が安全安心な学校生活を送るために【事前の食物アレルギー対応】、【アナフィラキシー発症時の対応】、【日常的な対応】に分けて、養護教諭は多様な支援を行っていることがわかっ

た。また宿泊行事においても、綿密な【宿泊行事前の準備】と注意深い【宿泊行事中の支援】の様子が明らかになった。さらに、対応の課題として、【準備徹底の困難】と【教員の意識の差】が障壁となり得ることが示された。そのような状況での養護教諭の役割として、【対応のプロであること】、【コーディネーターの役割】が求められていると認識していることが確認され、学校救急処置においても冷静で的確な対応と連携に関して責任を持つことが重要であると把握された。養護教諭は、児童生徒に出現している症状の観察とともにバイタルサインを測定して判断の指標にするなど、自身の持つ医学看護学的な知識と技術を十分に活かすとともに、常に研鑽を積むことで子どもの健康問題を的確に評価することが重要である。それこそが、養護教諭の専門性を発揮することにつながり、子どもたちにとって安全安心を確保できる学校づくりに寄与すると考える。さらに、この結果で示された観点を養護教諭はもちろんのこと、教職員全員が理解することで、学校におけるアレルギー対応が円滑かつシームレスに進められ、対象の児童生徒にとって安全安心な学校になるのみならず、すべての子どもに対しても他者を思いやる気持ちと応急手当を学ぶ機会になると考える。

本研究の一部は、2017～2019年度科学研究助成事業基盤研究(C)17K04835の助成を受けたものです。

利益相反に関する開示事項はありません。

## 文 献

- 1) 文部科学省アレルギー疾患に関する調査研究委員会(平成19年3月). アレルギー疾患に関する調査研究報告書. 2007.
- 2) 文部科学省中央審議会. 子どもの心身の健康を守り、安全・安心を確保するために学校全体として取り組みを進めるための方策について(答申). 2008.
- 3) 文部科学省. 平成25年度学校生活における健康管理に関する調査事業報告書. 日本学校保健会, 2013: 72-140.
- 4) 文部科学省スポーツ・青少年局. 学校のアレルギー疾患に対する取り組みガイドライン. 2008.
- 5) 文部科学省. “学校給食におけるアレルギー対応指針. 2015” [http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2015/03/26/1355518\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2015/03/26/1355518_1.pdf) (参照2019-02-01)
- 6) 蒲地千草, 平良 悠. 食物アレルギー児童に関する養護教諭の役割についての研究. 九州女子大学紀要 2011; 48 (1): 83-98.
- 7) 遠藤伸子. 学校現場における食物アレルギーの対応—養護教諭の立場から—. 保健の科学 2014; 56(11): 750-755.
- 8) 益子千佳, 石原研治. 小児アレルギーの症状とその対応—小児喘息を中心に—. 茨城大学教育実践研究 2011; 30: 183-193.
- 9) 井奥加奈, 小切間美保, 白石龍生. 大阪府下の小学校を中心とした食物アレルギーに対する教員の実態と問題点. 大阪教育大学紀要 第3部門 自然科学・応用科学 2010; 59 (1): 53-68.
- 10) 浅田知恵. 教員養成の段階における食物アレルギー対応に関する指導の必要性と課題. 愛知教育大学教職キャリアセンター紀要 2018; 3: 59-65.
- 11) 三木とみ子. 事例から学ぶ「養護教諭のヒヤリ・ハット」—アレルギー編—. 第1版. 東京: ぎょうせい, 2015.
- 12) 稲葉佳代子, 政二千鶴, 木場美紀, 他. 保育所及び小学校における食物アレルギー患児に対する対応(第1報)喘息児キャンプなどにおける対応の現状. 小田原女子短期大学研究紀要 2007; 37: 68-73.
- 13) 江尻ゆかり, 大谷祥子, 落合章子. 学校給食は今学校給食が当面している問題. 保健の科学 2003; 45 (7): 507-513.
- 14) 安西ふみ. エピペン® 処方児童生徒に対する学校対応の課題—養護教諭へのインタビュー調査より—. 食物アレルギー研究会会誌 2013; 14 (1): 24.
- 15) 西尾玲子, 大谷尚子. 食物アレルギーに対応できる学校救急体制の改善に向けた一考察—アナフィラキシーショック事故後の養護教諭の取り組みの分析から—. 学校救急看護研究 2015; 8 (1): 56-65.
- 16) 山田玲子, 福田博美, 藤井紀子, 他. 修学旅行でのアレルギー等緊急時を想定したチームシミュレーション講習における効果と課題. 北海道教育大学紀要 教育科学編 2019; 69 (2): 313-320.
- 17) 小倉 学. 改訂 養護教諭—その専門性と機能—. 第1版. 京都: 東山書房, 1985.
- 18) 文部科学省. 子どもの心のケアのために—災害や事件・事故発生を中心に—. 2010.

**[Summary]**

The purpose of this study was to examine the role of *yogo* teachers (school nurses), considering the present state of food allergies/anaphylaxis management in schools and the challenges they face. We conducted a survey using semi-structured interviews with four *yogo* teachers (school nurses) of elementary, junior and senior high schools. As a result, the present state of allergy management in schools was divided into [proactive response], [response at the time of onset], and [day-to-day response] in order to create an environment in which students feel safe and secure ; and the aspects of careful [preliminary preparation] and careful [support during a trip] were clarified for lodging event. In addition, [preparation difficulties] and [differences in teachers' awareness] were raised as problems associated with food allergies/anaphylaxis reactions, and *yogo* teachers (school nurses) were

required to be [professionals at handling] these situations and playing the [role of coordinators]. It is important that *yogo* teachers (school nurses) are trained in accurate correspondence and cooperation for emergency treatment. In particular, *yogo* teachers (school nurses) have to be capable to deal with various situations and be motivated to overcome difficulties due to diverse symptoms of allergy reactions. Moreover, it is considered that allergy management and support in schools can be smoothly and seamlessly enhanced when all the teachers understand allergy reactions and play the role of coordinators, and the school system ensures security and safety for such students.

---

**[Key words]**

responding to food allergies/anaphylaxis,  
school emergency treatment, *yogo* teachers